

アーチルニュース ちえなっぴ

発行元：仙台市発達相談支援センター 住所：仙台市泉区泉中央2丁目24-1
TEL：022-375-0110 FAX：022-375-0142 e-mail：archi@luck.ocn.ne.jp

「アーチルニュースちえなっぴ 創刊号」の発行にあたって

発達相談支援センター所長 末永カツ子

「アーチル」がオープンいたしまして早一年、ようやく「**アーチルニュースちえなっぴ 創刊号**」をお届けできます。名称を「**ちえなっぴ CHIN UP**：前を向いて」としました。アーチルニュースを読んでもくださる皆様が、困難に直面した時や、励まみや勇気が欲しい時に、ちょっと前を向いて、「氣を落とさずに一歩踏み出してみよう、チャレンジしてみよう！」「アーチルに相談にいきましょう！」とお願いいただけるようなニュースソースとしていきたいとの願いをこめました。定期発刊（年3回）としてまいりますのでぜひご愛読いただきたいと思います。

国際障害者年以降のノーマライゼーション、インクルージョンの理念の浸透により、障害者も、その家族も、人間として尊重され、個別ニーズに基づく生活に必要なサービスを利用できる新たなシステムが求められています。新たな発達障害児・者の地域ケアシステムの目標は「早期の出会い」と「生涯ケア」の実現です。この目標を共有する多くの機関とサービス、これを担う人と利用者とのネットワークがシステムを構成します。「アーチル」は、システムのコーディネーターとして、この目標の実現に向けた取り組みを行ってまいります。そのために、これまでの相談支援（児童相談所及び更生相談所の機能）に在宅の方々の家庭や施設に出かけていく機能も加え体制を整えました。さらに自閉症の人たちに対し専門的支援を総合的に行う拠点として「自閉症・発達障害支援センター」にも指定され、一層、重責を担うことになりました。アーチルはこれらの機能を駆使し、発達障害児・者の「育ちとくらしを支える視点」を大切に業務を進めてまいります。

「育ち」の視点とは、ライフステージの節目節目で生じる課題を予測し、見通しを立て対応していこうという視点です。これは発達障害児・者が成長や加齢に伴って生じてくるニーズに対していかにエンパワメントし解決していくかという縦断的視点であります。「くらし」の視点とは、日常生活において社会環境（社会資源や地域の人々）との相互作用のなかで生じてくるニーズに対応していこうという横断的視点です。これは地域での生活を継続していくためのニーズ（地域・社会側の課題も含む）に対していかにして社会環境に働きかけ解決していくかという視点であります。生涯ケアの中味は、この二つの視点を大切に、必要な支援・サービスを届け、足りない資源の開発やサポートネットワークをつくっていくことによって、安心して地域で生活ができるようにしていくことだと考えています。

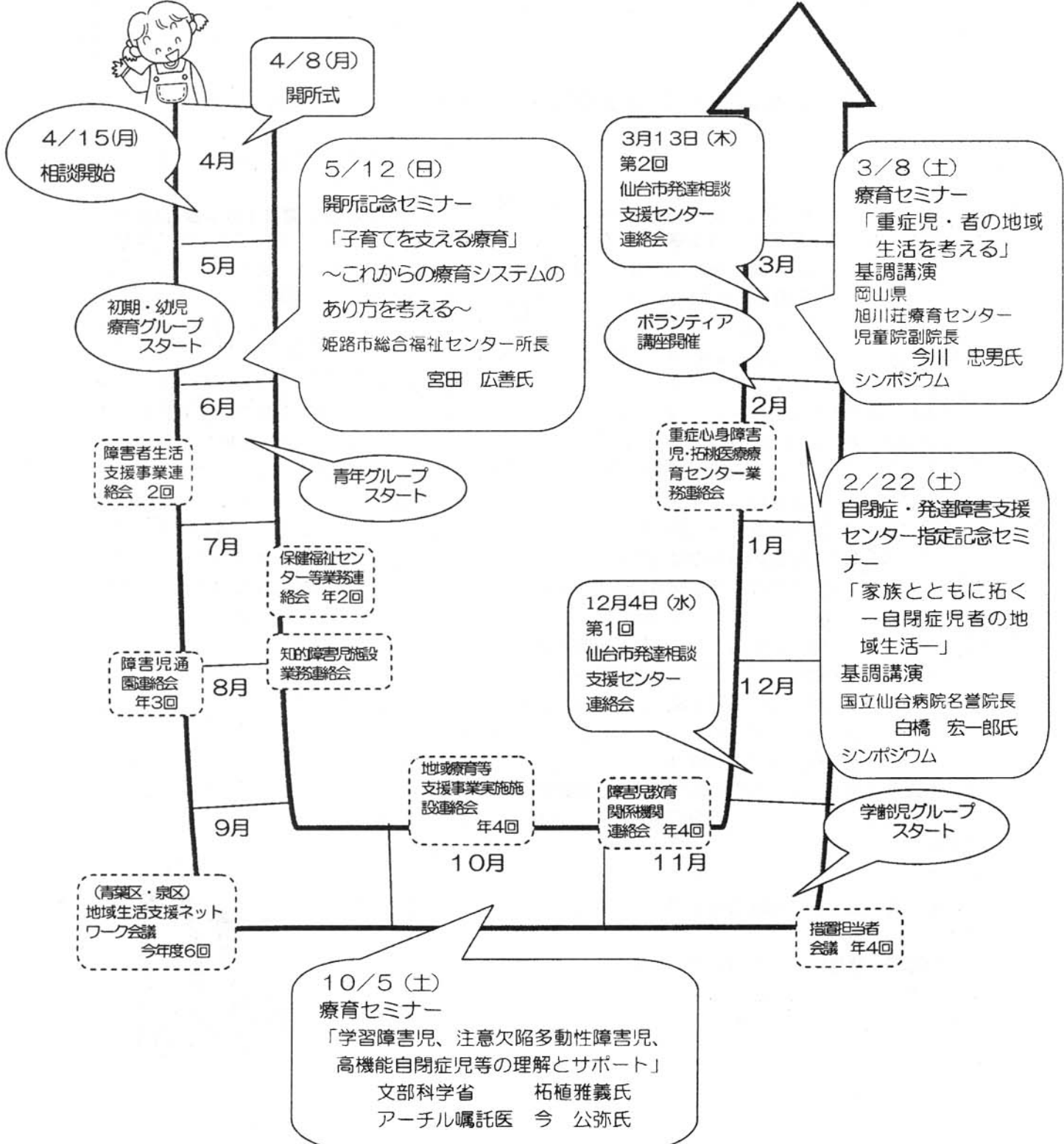
さいごに、皆様には発達障害児・者の地域ケアシステムを充実していくために「アーチル」が期待される役割を果たすよう忌憚のないご意見をいただきますとともに、「アーチル」を見守り育てていただきますようお願い申し上げます。



アーチルこの一年

スタートして一年が経ちました。様々な出会いがありました。

アーチルは、みなさんと力を合わせて、障害児・者の「育ちとくらしを支える生涯ケア」をめざしていきます。



平成14年度実施研修ダイジェスト

この1年間に実施したセミナーを報告いたします。

①アーチル開所記念セミナー

平成14年5月12日 アエル多目的ホール
参加者252名

「育ちとくらしを支える療育を」

宮田氏、アーチルのスタートにエール！

テーマ：「子育てを支える療育」～これからの療育システムのあり方を考える～
講師：宮田広善氏（姫路市総合通園センター所長）

障害児の医療と療育にかかわっている小児科医の宮田氏は、「これまでの医療モデルである一点集中型の療育センターが、障害児と家族の支援にどのような役割を果たしてきたか？」という視点から療育を再考し、育ちとくらしを支える療育システムづくりに力を注いでいる。当日はアーチルへの応援メッセージとして以下のような話をしてくださった。

- 障害児福祉理念の変容の中で、療育の目標は、障害を改善することだけでなく、障害があっても社会で生き生きと暮らしていけるように育てていくことに変化してきている。
- この変化に伴う援助目標は「地域生活への支援」の必要性であり、その施策の充実が求められる時代がきた。そこからおのずと療育センターの役割が見えてくる。
- その中身は、育てにくい子どもの「育児支援」に始まり、「生きる力」を育み「青年期の自立」をめざす支援が重要であり、そのためには家族を支援するサポートネットワーク形成が不可欠である。
- そして本人と家族の自己実現のためには誰もが安心して生活できる地域づくりが必要となる。



②療育セミナー

平成14年10月5日 仙台市役所8階ホール 参加者555名

「通常学級に在籍する軽度発達障害児にも支援を！」

テーマ：「LD児、ADHD児、高機能自閉症児等の理解とサポート」
講師：柘植雅義氏(文部科学省特別支援教育調査官) 今 公弥氏(アーチル嘱託医)

中公新書「LD(学習障害)」の著者でもある柘植氏は、教育の立場から「サービスの受けて側に立って多様なニーズを理解し、個人による支援からシステム化を図ることが必要である」と教育現場でのケアマネジメントの重要性を指摘された。今氏は医学の立場から、発達障害の考え方、診断することの意味や対応等について事例を交えながら、わかりやすく話された。当日は定員を大幅に超える多くの参加者があり、軽度発達障害に対する関心の高さが伺われた。こうしたニーズを受けて次年度もまた軽度発達障害をテーマにしたこのような研修会を企画、実施したい。

「くらしやすい地域づくりをめざして」 シンポで家族や関係者らが熱く語る

③自閉症・発達障害支援センター指定記念セミナー

平成15年2月22日 仙台メディアテーク 参加者300名

テーマ：家族とともに拓くー自閉症児・者の地域生活ー

アーチルが自閉症・発達障害支援センターに指定されたことを記念して行われた。基調講演の白橋氏からは、自閉症に対する理解と支援について最新の情報も交えてお話があった。幼児期からの一貫した支援体制が必要であり、「アーチルには、仙台市にある各相談機関の意見を調整して一つの方針を決めていく役割を果たしてほしい」というメッセージをいただいた。シンポジウムでは、自閉症児・者とその家族が地域で生活していくために必要なことは何か、そして「誰のためのセンターなのか」「困ったときの『駆け込み寺』になってほしい。本人と家族に密着したセンターになってほしい」「生涯にわたって困ったときにバックアップしてくれるセンターであってほしい」等といったアーチルへの期待が語られた。

基調講演

テーマ：「仙台市発達相談支援センターに期待すること」

講師：白橋宏一郎氏(国立仙台病院名誉院長・こだまホスピタル顧問)

シンポジウム

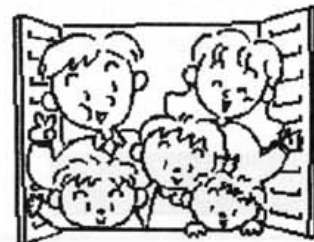
テーマ：「家族からの発信！自閉症児・者が地域で生活するために」

シンポジスト：鶴島綺紗子氏(自閉症協会大阪支部・「トミーの夕陽」作者)/細川紀久子氏(自閉症協会茨城支部事務局長)/谷口笙子氏(自閉症協会宮城県支部仙台分会長)/阿部芳久氏(東北福祉大学教授)/コーディネーター：今公弥氏(アーチル囁託医)

④療育セミナー

平成15年3月9日 アーチル大会議室 参加者112名

テーマ：重症児・者の地域生活を考える



基調講演の今川氏からは、重症児・者に対応する際の基本的な考え方などについて、話をいただいた。シンポジウムでは、シンポジストがそれぞれの立場から情報提供を行った後、フロアも交えて活発なディスカッションがなされた。このセミナーで重症児・者の生活支援を充実させていくためには情報交換の場が必要であり、ネットワークづくりが必要であること、そして具体的な問題に対して各機関がお互いにしっかりと責任を持ち、対応を検討していくことが重要だと確認した。

基調講演

テーマ：「重症心身障害児・者が地域でよりよく生活するために～これからの療育支援のあり方～」

講師：今川忠男氏(旭川荘療育センター児童院副院長)

シンポジウム

テーマ：「重症心身障害児・者が地域で生活するために」

シンポジスト：田中総一郎氏(宮城県拓桃医療療育センター)/穴戸秀明氏(宮城県光明養護学校)/伊藤寿彦氏(仙台つといの家)/伊勢節子氏(保護者)/コーディネーター：阿部幸泰氏(仙台医療福祉専門学校)

今年度の取り組みの中から

今年度実施した以下二つの取り組みについて、参加者の声も交えてご紹介します。

初期療育グループには、初めて相談にいらした低年齢のお子さんとお母さんが週1回通われています。小グループで遊びながら、お母さんと職員がともにお子さんの様子を確認したり、お子さんにあったかわり方の工夫を一緒に考えています。また、お母さん同士のグループワークの中では、子育てに関する共通の悩み事や家庭での過ごし方について情報交換をしています。今年度、215の方がこの療育グループに参加されました。次年度も引き続き、お母さんが希望を持って子育てに向かえるようバックアップしていきたいと思っています。

=参加者からの声=

「自分だけじゃなかった！」

同じ悩みを持つ仲間との出会いと学びの場
初期療育グループ

Aさん/順調に育っているお子さんをお持ちのお母さんと話すときは「どうしてうちだけ…」と疎外感を感じていましたが、このグループに来て、同じような悩みを抱えているお母さんと話すことで「悩んでいるのは自分だけじゃない」と救われた。

Bさん/障害のことを一緒に学べて、一人で本を読んで悩んで不安に思っていたところと比べて、だいぶ

気持ちが楽になった。

Cさん/子どもの障害を伝えられたときはショックが大きく、信じられない気持ちでいっぱいだった。もしかしたら突然治るのではないかと期待していた。しかし、グループに参加して、他のお母さんたちと話をしたり、成長している子どもの姿を見ることで、少し気持ちの整理がついてきた。



ボランティア養成講座は、発達障害を持つご本人とご家族の地域生活を支えてくれる「ボランティアさん」を養成し、支援の輪を広げていくことをねらいにしています。今回の講座には34人の市民の方が参加され、今後アーチルの事業の中でボランティアとして活動していただく予定です。

ます。

Eさん(主婦)/日頃感じていることは、障害そのものが障害なのではなく、その障害を周りに理解してもらえないことが最大の障害だということです。ボランティアをとおして、多くの人にいろいろな生き方を認めても

らえるようになれば素晴らしい。

Fさん(主婦)/今回の講座に参加して、ボランティア活動は義務や強制によるものではなく、自主性や主体性を持って取り組

「私にも何かできることが…」

ボランティア養成講座に34人の市民が参加

=参加者からの声=

Dさん(学生)/以前から障害のあるお子さんと接したいという気持ちを持

っていました。今回の講座に参加して改めて感じたことは、同じ診断がついていても性格や状態は一人一人違うということ、そして周囲の環境がとても大切であるということです。不安はありますが、今回の講座で学んだことを生かしてチャレンジしたいと思ってい

むことが大切であること、また、相手側の状態に関する基本的な知識を持ってかわかること、自分のできることを行うことが大切であることを学んだ。

月日	テーマ	講師
2月18日	「ボランティアってなーに？」	中村祥子氏(グループゆう代表理事)
2月27日	「発達障害児・者の特徴と支援」	杉山弘子氏(尚綱女学院短期大学)
3月6日	「ボランティアに思うこと」	大越紀子氏(家族)



かけはし

「アーチル」とは「アーチ arch」と「パル pal」とをかけたもので、センターが障害者と市民の「架け橋」になるようにとの願いを含め、市民公募によってつけていただいた愛称です。このコーナー「かけはし」は、読者の皆さんとアーチルが双方向で情報交換できるように、皆さんや職員からのメッセージなどを掲載していきます。今回のテーマは「アーチルスタッフが相談で大切にしていること」です。



相談の一つ一つの重みを痛切に感じる
毎日で、緊張の糸が緩むことはありません。
皆さんに信頼していただけるような相談が
できているのかを振り返りながら毎日を努め
たいと思っています。

(学童児相談員：仲野繁俊)



少しでも利用者の方々の不安な気持ちが軽くなるよう努めながら、相談を受ける側として、
皆様に信頼していただけるよう心がけています。

(成人相談員：福井健司)

お子さんの好きなこと、楽しめることが増え
てきたことをお母さんと一緒に確認できるととても
うれしくなります。

(療育グループスタッフ：高橋 恵)

これまで出会ったたくさんのお子さんや
ご家族から学んだことを今度はそれを必要と
している方々に手渡していきたいと願って仕事を
しています。

(言語聴覚士：鈴木和子)



アーチルでお話した内容にご意見や疑問などが
あれば、どうぞ教えてください。皆さんの意見を
素直に受けて、頼りになるアーチルになるよう
努力していきたいと思っています。

(心理：吉成謙枝)



常にアンテナを高くし、相談こいらした
お子さんと家族が安心してこれからの人生を歩めるよ
うに支援していきたいと思っています。
相談こいらした方たちの「ほっとした顔」が見られる
日々を想いながら相談室に足を運ぶ毎日です。

(乳幼児相談員：松岡幸枝)

編集後記

よーやっと！できました。その名も「ちえなっぷ」。編集スタッフ5人（プラスα：なかなかできないことに見かねた応援者あり）が、「ちょっと論文ぼくない？」とか「とにかくアーチルの一年をわかりやすく紹介したいね。」とか「レイアウトにセンスがない！！」などと喧嘩喧嘩(?)し創りました。「ちえなっぷ」は読者の皆さんを元気づけることができる広報誌を目指して頑張っていきます。次号（7月発行予定）も楽しみに待っていてくださいね。